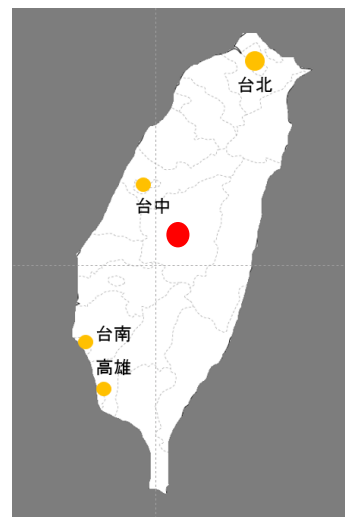


嘗ては邵族が主人公だった・日月潭

—手作りによる自力再建を支援する建築師

くらし学際研究所・チーム〈近隣アジアを知る〉

垂水英司



日月潭…言わずと知れた台湾を代表する観光地だ。私がそこを初めて訪れたのは、921地震が発生して2か月後、1999年11月のことだった。台湾内政部営建署担当者の案内で南投縣の被災地を視察する中で、大きな被害を受けた日月潭にも立ち寄った。

遊覧船の埠頭の背後には、旅館や土産物屋がびっしり軒を並べる街並みがある（日月村）。そこで車を止めて街なかを歩いてみた。倒壊を免れた家屋でも、窓やドアは壊れ、道にはまだ片付けられていないものが散乱している。もちろん観光客らしい人影は見当たらない。一方、湖畔に立って湖の方を見やると、平らかに広がる深緑の湖面、前方には幾重にも重なる島影が眼に入る。地震で傷ついた街並みと穏やかで美しい景観、その奇妙な対比に強い印象を受けたことが思い起こされる。



台湾を代表する観光地・日月潭。921地震で大きな被害を受けた。傷ついた街並みと美しい景観が奇妙な対比を見せる。

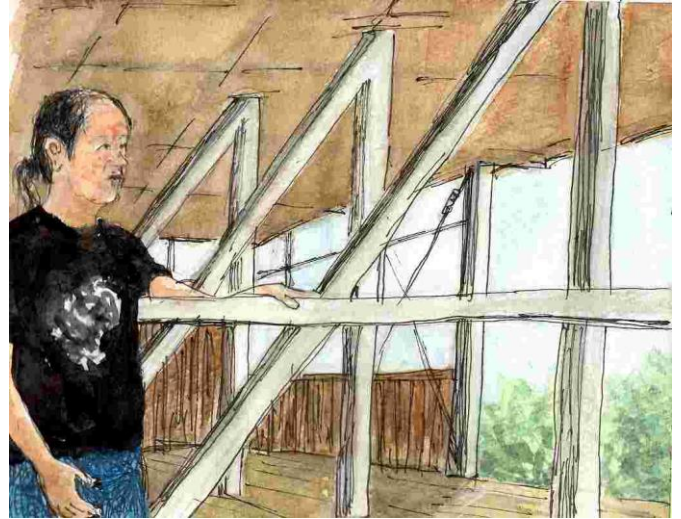
それからおよそ1年後、私は災害に関心を持つ日台の関係者と共に、再び日月潭を訪れた。今度は震災で家を失った邵族（サオ族）が自力で復興住宅を建てようとしている現場をみるためである。前回の駆け足視察では、全く気付いていなかったのだが、実は日月潭周辺は、嘗て台湾原住民族の邵族が地域の盟主だったのである。邵族の祖先は白鹿を追って日月潭の周辺（水沙連）にたどりつき、この地で広く居住するようになったといわれている。

しかし、その後邵族にとって苦難の歴史が始まった。清朝のころ、水沙連には漢人の入墾が始まり、さらに伝染病の流行などにより、邵族の人口は激減した。また、日本植民地時代、国民党政権時代の政策の中で、邵族の居住地は極めて限られたものになったのである。

現在邵族の人口は約780人（2018年3月）、台湾原住民族の中でも少数の族である。大部分は日月潭畔の日月村で漢人らと混住している。邵族は、これまで誤って雛族（ツォウ族）

の1支流と見なされてきたが、言語、文化、宗教も異なっており、運動の結果、2001年台湾原住民族第10番目の族として認定された。(現在は16族になっている)

921地震によって邵族の住まいは大きな被害を受けた。地域の役員は人を介して新竹で設計事務所を主宰していた謝英俊建築師に再建の支援を求めた。早速謝英俊は所員や仲間たちと現地へ駆けつけ、すぐさま自力更生による復興方式を提起した。彼がまず考慮したのは再建経費の問題だ。政府を含めて補助金は限りがあるため(別項参照)、15坪の建物を数十萬元(現在1台湾元=約3.68日本円)で実現したい。それには自ら手を動かして家を建てることだ。費用を節約できるだけでなく、自分たちの手で自分たちのコミュニティを作るという自力更生の精神に合致する。謝英俊は、原住民の伝統材料の竹、あるいは軽量鉄骨など回収可能な材料を組み合わせ、住民が手作りしやすい構造の設計をした。こうして「協力造屋」(みんなで住まいを作ろう)というプロジェクトが始まったのである。



建築師謝英俊は、被災者が手作りで、安く、早く、手軽に再建するシステム「協力造屋」を提案した。個性的な語り口で、このプロジェクトについて説明してくれた。

現場は、密集した観光街区を通り抜けてすぐ、少し高台になった一角である。骨格や屋根、壁などが6割がたできたところだ。謝英俊建築師が待っていてくれた。饒舌ということではなく、建築師らしい個性的な語り口で、このプロジェクトについて説明してくれた。

当時はまだ復興が始まったばかりの時だった。このプロジェクトは、台湾のマスコミでも取り上げられ、話題になっていた。私たち日本からのメンバーも大いに刺激を受けた。というのは、阪神・淡路大震災の復興の際、低所得者や高齢者など、ローンを組んで再建するに至らない被災者が続出した。安く、早く、手軽に再建するシステムが必要ではないか。しかし、緊急には有効な手法を見いだせなかった。この「協力造屋」も様々な問題をはらんでいだろうが、私たちのとっても大いにヒントになると受け止めたのだ。

謝英俊は、921震災の10年後発生した八八水害の復興でも、地域や被災者に寄り添いながら様々な実践をしている。そして、中国の四川大地震の後には、中国大陸へも赴きその活躍の場を広げていると聞く。921震災が人生の分岐点になったという台湾人は多い。謝英俊建築師もその一人といえるだろう。

9 2 1 震災における現金支給

9 2 1 震災では全壊世帯には20万円が支給されたほか、仮設住宅費用として家賃補助相当分が現金支給された。